

死生の門

古川成美

川成美著

生の門

— 沖縄戦秘録 —

中央社刊

海外輸出記念新裝版

昭和二十四年一月十五日 印刷
昭和二十四年一月二十日 發行
昭和二十五年一月五日 改訂五版

沖繩戰祕錄

死生の門

定價百九十圓

著者

古川 成美

發行者

東京都澁谷區穩田三丁目八十七番地
澤本 嘉郎

印刷所

東京都千代田區神田神保町三ノ二三
塚田 印刷所

東京都澁谷區穩田三丁目八十七番地

(發行所)

株式會社

中央社

振替東京四五〇八七番
電話赤坂(48)〇八五二番



まえがき

さきに一生還者の悲願から公にいたしました『沖縄の最後』が、はからずも多大の共感をうけ、遠く海外にまで輸出せられて、國際的反響さえもよびましたことは、著者としてまことに望外の結果で、感激にたえぬところであります。

ところがその後、數多くの讀者の方々から、心をこめた便りをいただき、そして更にくわしく沖縄戦全般の真相を知りたいとの御質問や御要望に幾千となく接しました。今にして思えば、前著は主として私一個人の體驗を中心とした記述でありましたため、これはまことに尤もな次第であります。

そこで私は、奇蹟的に生還した一人として、あの悲劇の全貌を、始終にわたり更に深く掘りさげて記録することが、前著の性質からも當然の義務であり、また一歴史學徒としての本務にもそうものであると思い、同時に今は會うすべもない多くの犠牲者たちを^{よぶ}甦らせる道でもあると考え、早速この仕事にとりかかったのであります。

これがためまず、廣く他の生還者から資料を集め、内外の關係記録を整理することからはじめまし

た。ところが、豫想をこえた貴重な資料、特に當時の真相と状況を廣く深く知りぬいておられる立場にあつた一生還者の、至寶的な、本書記述の骨幹となるべき資料に恵まれ、いざ執筆にかかうとした時、戦場の無理がたたつたのか、はからざる病を得て、ついに一時郷里に引きこもる身となり、このこともあきらめるのほかない破目に立ち到りました。

しかし、絶ちがたい宿業しゅくごうというのでしょうか、何としても筆を捨てかねて、一日三枚あるいは五枚と書きためているうち、漸く完成してここに御批判を仰ぐ運びとなりました。

そこにして戦ひ果てし焼け土に

こもる生命いのちか萌え出づるもの

かえりみれば、あの戦は、混乱と困苦と果てなき悲しみを残して、悪夢のように歴史の彼方にすぎましたが、この深刻な悲劇のあとに、新しい生命の芽吹くもの、萌えいずるものは何一つないので、ようか。いや、決してそんな筈はありません。

かつて流された血潮、いま流されている暗涙、すべてが、正義、仁愛、自由の實在する「より美しい世界への道しるべ」となることを私は確信いたします。

世の新しい指導者を以て任ずる人々の多くは、故意に戦の回想を避け、永久に救われぬ戦の犠牲者

の運命にまでも、目をそむけようとするかに見えます。しかし私は、沖繩の戦が「強いられた忘我の心」から「ありのままの人間の心」を發見した偉大な精神革命の端緒であつたことを、身を以て知つた一人であります。あの世紀の悲劇が、散つた十萬の人々の「死の門」であつたと同時に、よりよき日本、よりよき人類への「生の門」となつて、新日本再建への反省につながることを信じます。ひたすらそう念じつつ、この貧しい一書を世に捧げるものであります。

若し本書によつて、當時の真相を御報告することができ、かつ以上のような私の意圖をくみとつていただけるものがありますならば、それはひとえに、死生の中の尊い體驗と資料をお寄せ下さつた方、並びに私をいたわりはげまして下さつた恩師知友の御芳情によるものであります。

なお本書は、あくまで當時の歴史的眞實を忠實に記述したのでありますが、ただ二、三の現存者の名を別名にした外、書中の人物の心理描寫等については、あるいはいくばくの距離あるを恐れます。この點は叙述の形式に免じてお目こぼしを願いたく、また内容の性質上、舊軍隊的な用語や表現が割合に目立ちますと同時に、本文や地圖に現われる地名等については、舊日本名によりましたことも、あらかじめおことわりいたしておきます。

昭和二十三年十二月

著者しるす

目次

ま え が き 一

第一章 縁の島

一	轉落	三
二	情勢急轉	八
三	計畫	三
四	空と地の對立	三
五	十月十日	三
六	運命への隨順	元
七	新配備	四
八	紅椿の家	五五

九 生き抜く道…………… 六

一〇 捨て石部隊…………… 七

一一 迫り来る影に…………… 七

一二 運命の流れ…………… 八

第二章 鐵 火

一 扉はひらく…………… 八

二 艦隊出現…………… 七

三 噴火山上…………… 九

四 主力遂に上陸…………… 九

五 暗 流…………… 一〇

六 司令部の對立…………… 一三

七 二つの極端……………二〇

八 一進二退……………二五

九 首里洞窟司令部……………二九

一〇 五月四日……………三七

第三章 後 退

一 去りゆくもの……………二五

二 首里城周辺……………二六

三 死所をいずこに……………二七

四 退却攻勢……………二九

五 首里よさらば……………二九

六 津嘉山にて……………二九

七 南端摩文仁へ……………一五

八 最終の配備……………二四

第四章 末期

一 岩窟の群像……………二〇

二 新陣地の激闘……………三〇

三 海軍部隊の全滅……………三六

四 最後の命令……………四〇

五 降服の溝……………三八

六 斷末魔の洞窟……………四四

七 第三十二軍の最期……………五七

八 生命の朝……………五二

裝
幀

向

井

潤

吉

畫

伯

死生の門

—沖繩戰祕録—

古川成美著

第一章 緑の島

一、轉落

「うけなう。これはいよいよかんぞ。」

思わず、眉根^{まゆね}をよせ、キツト唇^{くちびる}をかんだ三原大佐は、危うくそう聲に出すところであつた。

（一體、この俺をどこまで落そうとするのか。）

昭和十九年三月九日、所は參謀本部作戰課の一室。

南太平洋戰線の死闘をよそに、作戰から離れた不足な役をおしつけられて二年、うつうつとして樂しまなかつた大佐は、今朝、大本營參謀を命ぜられ、とびたつ思いでここに出頭したのであつた。が、いきなり、

「ああ君か。君は今度新設される南西諸島守備軍の參謀だ。」

總務課長芝田大佐が無表情に申し渡した。一言に、期待はますますくつがえされた。しかも、今この作戰課でたしかめると、新設軍の内容は言語同斷、飛行場警備のために僅かな地上部隊をおくばかり、ただの師團に毛の生えた三等軍ではないか。

（俊寛だ、俊寛だ。なぜ俺をこんな片隅においやるのだ。）

悲憤の涙溢れんとする彼の臉に、ふと、ビルマ軍參謀當時、作戰をめぐる長官との激しい論争の場面が浮ぶ。

（俺は馬鹿なんだ。女中奉公の要領を知らないからだ。）

伯耆大山を朝夕に仰ぎ、土に育つた少年時代、慈母は早く世を去つて冷い家庭、傷きやすい童心には、いつしか、何氣ない他人の言葉にも親愛と敵意を鋭く見わけくせが生れた。淋しい夕べ、悲しい朝、今にみると心に叫んで眺めた大山、その山の彼方へ巢立つて、はじめてくぐる陸士の門、不屈の意志、精緻な頭腦、恵まれた體力、揃う三拍子に成績は遠く群を抜いた。選ばれて入る陸軍大學、斬新な着眼、鋭利な洞察力、彼の戰術答案は常に教官たちを驚かせた。彼が陸大をトップの成績で出た頃、世は漸く軍人萬能、參謀本部、駐米大使館、陸大教官、と俊秀コースをたどり、華やかな得意の時代がつづいた。

だが、昭和十七年、突然ビルマ派遣軍作戦主任參謀となり、會心の職務についたのも束の間、再び陸大兵學教官に逆もどしされた上、同年八月、同期生の第一次大佐進級組十名のうちに、當然そのトップにあるべき彼の名前は見當らなかつた。

（俺は下手なんだ。味噌すり坊主ができないからだ。）

中央部の闇取引人事、親分子分の黨派專制、それも漸く世の注目をひいていた。しかし、更に大きい理由、救うべからざる惡傾向が軍の中樞部を支配しつつあつた。

それは、「知性の排撃」だ。

ガダルカナル戰以來、形勢日に非なる太平洋戰を繼續しようとする指導者によつて、何よりもしりぞけられたものは、冷靜な理性であつた。彼等はがむしやらな勇氣のみが、この破局的な戰を救うるとしていた。ガダルカナル戰の參謀長、宮崎少將が陸大幹事に歸任してからは、大學の教育はますます精神力萬能の趣を呈した。判斷力、洞察力、組織力などの鍊磨は殆んどかえりみられず、戰術教育は形式的となり、これに代つて氣分本位の參謀心得とか精神修養とかがやかましく、日本軍一〇師は外國の三〇師に匹敵すとの公式を遵法しなければ、卑怯者と罵られた。

今や戰局は知力を用うるにはあまりにも錯雜且つ苛烈である。ただ鞏固なる意志のみがよく敵を壓倒しうる——というクラウゼヴィッツ式の戰術思想は、勢い秀才を目の仇ともするようになった。このかなしむべき知性排撃の旋風、少くともそのあおりが、三原大佐左遷の因となつた。

新設軍は第三十二軍と稱し、マリアナ群島におかれた第三十一軍の姉妹軍、サイパンの豫備陣地を